# 20［小説］　『忘れられなくて』

　①「聞いているのか？」多少しているようなの声で、は現在に引き戻された。「聞いてるわよ、それで？」②思わず口もとにみを浮かべながら乃理子は話の続きを促した。若須は渡米してから三年の後に帰国するに至ったを話していた。

　このはいつもこうだ、と乃理子は思う。自分に関心が集まらないとすぐにれて、子どもみたいに駄々をこねる。ａキョウミを引きたいばかりに怒ったふりをして見せたりする。ほんとうに子どもみたいだ──。

　ニューヨークでの月日は、若須のキャリアアップにはつながらなかったようだった。案の定というべきか、との生活はあっという間にｂ破綻したらしかった。もう身も心もボロボロだよ、とｃジョウダンめかして若須は言ったが、それがほぼ本音であることが乃理子にはる。

　若須の話にを打ちながら、乃理子はその月日の中での自分のことを思った。気が狂いそうなほど会いたくて、会いたい気持ちの出口を見つけられなくて、毛布をかぶって獣みたいに泣いた夜や、職場で自分てのエアメイルや海外からのファックスを受け取る度に、もしかしたらと胸を破裂させそうにしていたこと──。

　忘れてもいいと思っていた。そのはずだった。少なくとも、ここに移転してきたときに──若須と一緒に暮らしていた部屋をあとにしたとき、すべてを忘れることにしたはずだった。

　③ひとの気持ちは怖いな、と乃理子は思い、まるでごとみたいにそう思った自分がしくて少し笑った。忘れてもいい、などと格好つけていたくせに、さっき若須の声を耳にしたときの自分のときめきようは弁解のｄヨチもないくらいだ。「何か可笑しいか？」ごく小さな乃理子の笑い声を［　　Ａ　　］聞きつけたらしい若須が言った。「ううん、別に……。なんでもない」そう答えてはみたが、乃理子の声にはまだ少し緩やかな笑いが含まれていたかも知れない。それからを置かずに、若須はとうとう言った。「……会えないか？」

　④もういいころだろう。こんなにも長いこと、自分は待ち続けていたのだから。タイミングよく、背後で体温の動くｅケハイがする。「構わないわよ、あたしは。良ければ家に遊びに来て」そうして若須に答える隙を与えず、ことばを重ねる。「ごめんなさい、子どもが起き出してむずかってるの。もう切ってもいい？」若須が息をむ。しゃっくりみたいな音が聞こえてきた。「一昨年結婚したのよ。息子は来月はじめてのお誕生日。だから、良ければ顔を見に来て。とにかく子どもが泣き出しちゃったから。また電話してよ」

　若須の答を待たずに、乃理子は受話器を戻した。

　忘れよう、許そうと思っていたはずだった。けれど若須のあのの沈黙は、乃理子の心をゴムまりみたいに弾ませていた。長いこと待ち続けていたのは、正にこの瞬間だったのだ。

　そろそろ夫が帰ってくる時間だ。夕食の献立を忙しく考えながら、乃理子はベビーベッドに駆け寄った。

●語注

キャリアアップ＝地位の高い高給の職に自分を売り込むこと。

エアメイル＝航空便。

問１　二重傍線部ａ〜ｅの漢字は読みを記し、カタカナは漢字に直せ。2点×5

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問２　傍線部①とあるが、どうして若須はそのような声を出したのか。次の文に続くように二〇字以内で答えよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕感じたから。

問３　傍線部②とあるが、乃理子が「微笑みを浮かべた」のはなぜか。二〇字以内で答えよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　若須について当てはまらないものを次から一つ選べ。6点

ア　渡米前には乃理子と一緒に暮らしていた。

イ　ニューヨークでキャリアアップを図ろうとしていた。

ウ　ニューヨークでは一時、美佐と生活していた。

エ　乃理子とニューヨークでやり直そうと考えていた。

オ　ニューヨークでは三年の間暮らしていた。

〔　　　〕

問５　傍線部③のように乃理子が思ったのはなぜか。次の文に続くように一五字以内で答えよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕自分に気がついたから。

問６　空欄Ａに入る「耳」を含んだことばを答えよ。5点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　傍線部④とあるが、何が「いいころ」なのか。最も適当なものを次から選べ。8点

ア　若須を許して再会し、また昔のように過ごすこと。

イ　待ち続けていた自分の気持ちに正直に若須を受け入れること。

ウ　機会をずっと待ち続けていた、精神的な仕返しをすること。

エ　別れた後の自分のことを話して、驚愕させること。

オ　自分の気持ちとは裏腹に、わざと拒絶して若須をじらすこと。

〔　　　〕

【解答】

問１　ａ興味　ｂはたん　ｃ冗談　ｄ余地　ｅ気配

問２　乃理子が若須の話に集中していないように（感じたから。）（傍線部の内容がなければ×）（19字）

問３　子どもみたいな点が変わっていないから。（19字）

問４　エ

問５　忘れてもいないし許してもいない（自分に気がついたから。）（傍線部の内容がなければ4点減点）（15字）

問６　耳ざとく

問７　ウ

■覚えておきたい語句

□6　案の定…………………思ったとおり。

□7　破綻……………………物事がうまくいかなくなること。

□22　息を呑む………………はっと驚いて息をとめる。

□25　驚愕……………………非常に驚くこと。

〔場面解説〕

三年前、一緒に暮らしていた乃理子を捨て、美佐とニューヨークに渡った若須から、突然、乃理子の自宅に電話がかかってくる。彼のことを忘れたはずだったが、声を聞き、心がときめく。「会えないか」と誘われた乃理子は、「子どもが起きたから」と、幸せな今の自分の状況をぶつけることで、身も心もボロボロで自分を求めてきた若須に復讐を果たす。

〈作者＆出典〉鷺沢　萠（さぎさわ・めぐむ）一九六八年（昭和43）～二〇〇四年（平成16）東京都生まれ。小説家。一九八七年、当時最年少の18歳で文學界新人賞を『川べりの道』によって受賞。『ほんとうの夏』『君はこの国を好きか』で芥川賞候補となるが、惜しくも受賞はない。本文は、「これまでの人生を振り返ったときに『何の後悔もしないわ』とだけは決して言えないだろう」女性たち（落第生）が主人公の短編集『Ｆ―落第生』（角川書店、一九九六年）所収「忘れられなくて」より。

【読みのセオリー】

★視点を意識する

　視点で解き方が違ってくる。主人公の人称や作品中の心理描写から、視点を確認する。

①一人称小説

　→作品中から心情を探す。

②三人称小説

　→状況や事態、行動や会話から推測する。

（三人称でも、話者が寄り添っている人物の心情は語られていることもある。）

※この小説は乃理子に寄り添って書かれている。

■読みのセオリー［実践］視点を意識する

問３　乃理子の心理描写にあたる部分を見てみよう。

　②思わず口もとにみを浮かべながら乃理子は話の続きを促した。

　　　↓

この男はいつもこうだ

　　　　　　　 ↓

自分に関心が集まらないと

［１　　　　　　　　　　　　　　　］

ほんとうに［２　　　　］みたいだ。

　　　↓

　「いつも」といっているのだから、［３　　　　］と変わらず同じようだ。

〔解答〕

１すぐに焦れて、子どもみたいに駄々をこねる　２子ども　３昔（三年前）

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問３　傍線部②とあるが、乃理子が微笑みを浮かべた理由として最も適当なものを次から選べ。

ア　電話が若須からきたことが嬉しくて仕方がなかったから。

イ　若須が自分のところに戻ってきたがっていることを察知したから。

ウ　若須が相変わらず子どもみたいなことに気がついたから。

エ　若須が子どものように甘えてこようとしていることを感じたから。

オ　仕返しのチャンスが来たことにほくそ笑んだから。

　［答］　ウ

＊差し替え

問５　傍線部③の乃理子の心情として最も適当なもの次から選べ。

ア　気が狂うほどだったことすら、すっかり忘れていたことに気がついたから。

イ　忘れられず若須にすがろうとしている自分に気がついたから。

ウ　真剣に愛していたことすら忘れてしまっていた自分に気がついたから。

エ　忘れることも許すことも出来ていなかった自分に気がついたから。

オ　他人ごとみたいに今の自分を見つめられる、自分の中の別の存在に気がついたから。

　［答］　エ

＊新問

問８　この文章の書かれ方について当てはまらないものを次から一つ選べ。

　ア　三人称小説ながら、乃理子の心理描写が細かく描かれている。

　イ　結末に向けて、読者の予想と逆転するような仕掛けがなされている。

　ウ　登場人物二人の、心の揺れ動きが詳細に描かれている。

　エ　現在の出来事と、回想とがうまく混じりながら書かれている。

　オ　短めの文を多用しながら、主人公の心理描写を理解しやすいようにしている。

　［答］　ウ